

# 化学物質等安全データシート

整理番号 L0<sub>2</sub>

作成 平成 5年 3月 31日  
改訂 平成 11年 10月 1日  
改訂 平成 19年 1月 17日  
改訂 平成 20年 6月 1日

---

【製品名】

液化酸素

---

# 化学物質等安全データシート

## 1. 化学物質等及び会社情報

化学物質等の名称 : 液化酸素  
 製品コード :  
 化学名 : 酸素(Oxygen)  
 会社名 : 小池酸素工業株式会社  
 住所 : 東京都墨田区太平 3-4-8  
 担当部門 : ガス部  
 連絡先 : Tel; 03-3624-3535 FAX; 03-5819-0970  
 E-mail;  
 整理番号 : LO<sub>2</sub>  
 緊急連絡先 :

## 2. 危険有害性の要約

**重要危険有害性及び影響** : 超低温容器または貯槽が高温にさらされると、容器内の圧力が異常上昇して破裂のおそれがある。  
 : 高圧ガス容器からガスが噴出し目に入れば、目の損傷、あるいは失明のおそれがある。  
 : 高濃度の酸素ガスを長時間吸入すると、人体に悪影響を与える。  
 : 超低温のため、直接または超低温状態の配管等に接触すると凍傷を起こす。

### GHS分類

**物理化学的危険性** 支燃性・酸化性ガス 区分1  
 高圧ガス 深冷液化ガス  
**健康に対する有害性**  
**環境に対する有害性**

記載がないものは分類対象外または分類できない

### GHSラベル要素

#### 絵表示



**注意喚起語** : 危険  
**危険有害性情報** : 発火または火炎助長のおそれ；酸化性物質  
 : 深冷液化ガス；凍傷または傷害のおそれ。  
**注意書き** [予防策] : 可燃物から遠ざけること。  
 : 減圧バルブにはグリースおよび油を使用しないこと。  
 : 耐熱手袋／保護衣／保護面／保護眼鏡を着用すること。  
 [対応] : 火災の場合には、安全に対処できるなら漏洩を止めること。  
 : 凍った部分をぬるま湯で溶かすこと。受傷部はこすらないこと。  
 直ちに医師の診断／手当てを受けること。  
 [保管] : 日光から遮断し、換気の良い場所で保管すること。  
 [廃棄] : 内容物／容器は勝手に廃棄せず、製造者または販売者に問い合わせること。

### 3. 組成及び成分情報

単一製品・混合物の区別 : 単一製品  
 化学名又は一般名（化学式） : 酸素 (O<sub>2</sub>)

成分及び含有量:

化学物質	CAS No	分子量	官報公示番号		成分濃度
			化審法	安衛法	
酸素	7782-44-7	32.00	適用外	適用外	99.5%以上

### 4. 応急措置

吸入した場合 : 高濃度の酸素ガスを吸入し中毒症状が現れた場合は、新鮮な空気の場所に移し、安静、保温に努め、医師の手当てを受ける。  
 : 呼吸が停止している場合には人工呼吸を行なう。

皮膚に付着した場合 : 凍傷を起こす。凍傷部分をこすってはならない。凍傷部は感覚がなくなり黄色いろう質状になるが、温まると水ぶくれができ、痛みが出て、化膿しやすくなる。ガーゼなどで保護して医師の手当てを受ける。  
 : 衣服が凍り付いて取れないときは、無理に取らないで、その他の部分のみ衣服を切り取る。患部を水で徐々に温める。常温に戻り、更に凍傷部が熱を持つ場合は冷水で冷やす。

目に入った場合 : すぐ医師の手当てを受ける。

飲み込んだ場合 : -

応急措置をする者の保護 : 液化酸素が漏洩または噴出している場所では、液化酸素を皮膚に接触させないように、保護具を着用する。  
 : 液化酸素が漏洩または噴出している場所は、空気中の酸素濃度が上昇している可能性があるため、換気を行い、必要に応じ陽圧自給式呼吸器を着用する。

### 5. 火災時の措置

消火剤 : 周辺火災に合わせた消火剤を使用する。  
 : 液化酸素が漏洩している火災の場合は、水散布、水噴霧または泡を使用する。  
 : 容器の昇温を防ぐため、水で容器を冷却する。  
 : 酸化性なので付近で火災が発生した場合、火勢を強め、より激しく爆発的に燃焼させるので、速やかに液化酸素の供給を絶つこと。

使ってはならない消火剤 : なし

火災時の特有の有害危険性 : 周囲のものをできるだけ遠ざけること。液化酸素は気体の酸素より密度が高いので酸化性が強烈である。  
 : 液化酸素は加熱されて気化すると、約 860 倍の体積になることに注意すること。  
 : 容器が火炎にさらされると内圧が上昇し、安全装置が作動し、酸素ガスが噴出する。内圧の上昇が激しいときは、容器の破裂に至ることもある。容器を安全な場所へ搬出すること。搬出できない場合には、できるだけ風上から水を噴霧して、容器を冷却すること。

特有の消火方法 : 火災を発見したら、まず部外者を安全な場所へ避難させる。

消火を行う者の保護 : 耐火手袋、耐火服等の保護具を着用し、火災からできるだけ離れた風上から消火にあたる。

### 6. 漏出時の措置

人体に対する注意事項、保護具及び緊急時措置 : 作業着等に着火の恐れがあるため、液化酸素にさらされないよう注意する。

- : 火災の危険を減らすため、窓や扉を開けて換気を良くすること。換気設備があれば、速やかに起動し換気する。
- : 大量の漏洩が続く状況であれば、漏洩区域をロープ等で囲み、部外者が立ち入らないよう周囲を監視する。
- : 漏洩区域に入る者は、陽圧自給式呼吸器を着用すること。
- : 空気中の酸素濃度を測定管理すること。
- 環境に対する注意事項**: 環境への影響はない。
- 回収、中和、封じ込め**: 漏洩した液化酸素は気化させ、換気を良くし、速やかに大気中に拡散、希釈させる。
- 及び浄化の方法・機材**
- 二次災害の防止策**: 木、紙、油等の可燃物を取り除くこと。液化酸素や酸素濃度の高い空気は、有機物や可燃性物質と接触させないこと。
- : 全ての着火源を取り除くこと。

## 7. 取扱い及び保管上の注意

### 取扱い上の注意

#### 技術的対策

- : 液化酸素の温度は、 $-183^{\circ}\text{C}$ と極めて低温であるため、直接触れないよう特に注意すること。
- : 液化酸素のような低温の物の中に、常温の物を入れると激しく液化酸素が沸騰し、飛沫が飛び危険である。このような作業は、危険について良く教育された者が保護面や保護衣を着用して行うこと。
- : 液化酸素が接触する物は清浄に保ち、油脂類、有機物、ごみ等が付着してはならない。
- : 液化酸素、酸素ガスの触れる部分を、油脂類の付着した汚れた手や手袋で取り扱わないこと。事前に手、手袋、衣服への油脂類の付着がないか、確かめること。万一、酸素ガス中で油脂類に着火すると、爆発的な燃焼を起こす。
- : 供給システムに使用するガスケットは、可燃性のものを用いないこと。
- : 液化酸素は、液化空気と正確に区別して取り扱うこと。
- : 液化酸素の供給に用いられる機器や方法は、消費する機器や使用量等によって決められる。使用者は、供給・貯蔵機器の正しい操作方法を製造者または販売者から指導を受け、これらの指示事項に従うこと。
- : 超低温容器（以下 LGC）は、常に立てた状態で取り扱い、転落、転倒等を防止する措置を講じ、かつ、粗暴な扱いをしないこと。LGC を倒すと内槽が壊れて、内外槽間に液化酸素が入って、急激に蒸発し、その圧力で外槽が破壊することがある。
- : LGC の使用にあたっては、容器の刻印、塗色、表示等により、ガス名を確かめ、内容物が目的のものと異なるときには使用せずに、販売者に返却すること。
- : ハンドルの付いた LGC の弁にはレンチを使用しないこと。もし弁が手で開かないときには、販売者に連絡すること。
- : LGC から直接使用しないで、必ず圧力調整器を使用すること。
- : 圧力調整器の取り付けにあたっては、容器弁のネジに合ったもの確かめて使用すること。
- : 圧力調整器を正しい要領にて取り付けした後、容器弁を開ける前に、圧力調整器の圧力調整ハンドルを反時計方向に回してゆるめ、その後、ゆっくりと容器弁を開く。この作業中は、圧力調整器の側面に立ち、正面や背面に立たないこと。
- : 継手部、ホース、配管および機器に漏れがないか調べる。漏洩検査は、石けん水等の発泡液による方法が簡単、安全で確実である。
- : 液化酸素を使用するときは、ガス取り出し弁または液取り出し弁は全開すること。
- : 作業の中断あるいは終了後、作業場所を離れるときは、ガス取り出し弁また

- は液取り出し弁を閉じる。その後圧力調整器内のガスを放出し、圧力調整ハンドルをゆるめておくこと。
- 局所排気** : 液化酸素を使用するにあたっては、空気中の酸素濃度が上昇する可能性があるため、密閉された所や換気の悪い所で行わないこと。
- 全体換気** : 気化した酸素を放出しなければならない場合は、火気、スパーク、その他の着火源から離れたところで放出し、良く換気をすること。
- 注意事項** : 液化酸素は、気化すると約 860 倍の体積になるため、特に注意すること。
- : LGC の修理、再塗装、容器弁および安全装置の取り外しや交換等は、容器検査所以外では行なわないこと。
- : LGC の刻印、表示等を改変したり、消したり、剥したりしないこと。
- : LGC の授受に際しては、あらかじめ LGC を管理する者を定め、LGC を管理すること。
- : 契約を示す期間を経過した LGC、および使用済みの LGC は、速やかに販売者に返却すること。
- : LGC やコールドエバポレーター（以下 CE）には、充てん許可を受けた者以外は充てんを行ってはならない。
- 安全取扱い** : LGC の口金内部に付着した塵埃類を除去する目的でガスを放出する場合には、口金を人のいない方向に向けて、ガス出口弁を短時間微開して行うこと。
- 注意事項** : LGC が空になったときは全ての弁の開閉について、容器取り扱い説明書による確認を行い、残留する液化酸素の気化による昇圧のないことを確かめ、その出口保護金物等を全て取り付け、販売者に速やかに返却すること。
- : 液化酸素を取り扱ったり、保管したりする場所の地面（床面）は、アスファルト舗装を施さないこと。
- : 液化酸素は、空気よりもはるかに酸化性が強いので、アルカリ金属、安息香酸（粉末）、二硫化炭素、繊維物質、水素+触媒、アセトン、アセチレン、アルコール類、油膜等と誤って接触させないこと。
- : 有機物や可燃物が液化酸素、酸素ガスと接触すると、これらの物はほとんどの温度、圧力で酸素と激しく反応したり爆発したりする危険性がある。
- : 一度酸素ガスを含むと、布、木材などの多孔質の有機物は、時間の経過とともに酸素濃度が高くなる可能性がある。これらのものは、激しく燃焼するので、着火源に近付けないこと。
- : 空気中で不燃性、難燃性といわれる物質でも、酸素ガス中では多くの物質が燃焼する。
- : 酸素は水が共存すると金属の腐食を促進する。
- 保管上の注意**
- 適切な保管条件** : 液化酸素用の LGC は可燃性ガス、毒性ガスと区別した容器置場に、充てん容器および使用済み容器に区分して置くこと。
- : 液化酸素の容器置場には、消火設備を設けること。
- : 貯蔵場所の酸素濃度が、25 vol%を超えないように換気し、酸素濃度の測定管理を行うこと。
- : LGC は、火炎やスパークから遠ざけ、火の粉がかからないようにすること。
- : LGC は、電気配線やアース線の近くに保管してはならない。
- : LGC は、水はけの良い、換気の良い乾燥した場所に置くこと
- : 可燃物を LGC や CE の近くに置かないこと。
- : LGC や CE は、腐食性の雰囲気や、連続した振動にさらされないようにすること。
- : 決して安全弁の元弁を閉止しないこと。
- 安全な容器** : LGC および CE は液化酸素用として製作されたものであること。
- 包装材料**

## 8. 暴露防止及び保護措置

- 設備対策 : 屋内で使用または保管する場合は、可燃性のものは遠ざけ、酸素濃度が 25 % を超えないよう換気を良くする措置を施すこと。
- 許容濃度 : 日本産業衛生学会(2007年版) : 規定されていない  
 ACGIH(2007年版) TLV-TWA : 規定されていない  
 TLV-STEL : 規定されていない

### 保護具

- 呼吸器の保護具 : 特別な保護具はいらない
- 手の保護具 : 革手袋
- 目の保護具 : 保護面、保護眼鏡
- 皮膚及び身体の保護具 : 保護衣。難燃性または不燃性の作業服等を着用するのが望ましい。

## 9. 物理的及び化学的性質

- 外観 : 薄青色の液体
- 臭い : 無臭
- pH : 該当しない
- 融点・凝固点 : -218.4 °C
- 沸点、初留点 : -183.0 °C  
及び沸騰範囲
- 引火点 : なし
- 燃焼又は爆発範囲 : なし  
の上限/下限
- 蒸気圧 : 13.33 kPa (-198.7 °C)
- 蒸気密度 : 436 kg/m<sup>3</sup> (臨界点)
- 液密度 : 1.14 kg/l (沸点)
- 溶解度 : 3.10 ml/100 ml 水 (20 °Cの水における Bunsen 吸収係数を 100 ml 水に換算)
- オクタノール/水 : 情報なし  
分配係数
- 分解温度 : なし
- その他のデータ
- 臨界温度 : -118.6 °C
- 臨界圧力 : 5.04 MPa

## 10. 安定性及び反応性

- 安定性・危険有害 : 支燃性・酸化性物質である。
- 反応可能性
- 避けるべき条件 : 浸透しやすい繊維類、木材などとの反応。場合によっては火薬と同じような爆発を起こす。液化酸素は、酸素密度が高いだけに、圧縮酸素よりも、さらに酸化性が強烈で、液酸爆薬としてダイナマイトの代用に使用される程である。
- : 有機物やその他の燃えやすいものとの反応。  
酸素濃度が高まるにつれて燃焼速度の増加、発火点の低下、火炎温度の上昇および火炎長さの増加が起きる。
- 混触危険物質 : 浸透しやすい繊維類、木材。有機物やその他の燃えやすいもの。
- 危険有害な分解生成物 : なし

## 11. 有害性情報

- 急性毒性(吸入) : 空気中の酸素濃度が上昇するにつれ、人体に対し次のような影響をおよぼす。

酸素濃度(vol%)	影響
18 ~ 25	安全範囲
36	長時間呼吸の高濃度中毒症状の限界
46	短時間呼吸の高濃度中毒症状の安全限界であり、てんかん様全身けいれん、口唇けいれん、めまい、嫌悪、不快な呼吸感、筋けいれん、錯乱、幻聴、視力障害、足指の疼痛等の症状が現れる。

## 12. 環境影響情報

: 情報なし

## 13. 廃棄上の注意

- : 使用済み LGC はそのまま LGC 所有者に返却すること。
- : LGC に残ったガスは、みだりに放出せず、圧力を残したまま LGC のガス取り出し弁を閉じ、製造者または販売者に返却すること。
- : 液化酸素を廃棄する場合は、ガス取り出し弁から周囲に火気、可燃物（含アスファルト舗装）のない通風の良い場所で、危険のないよう少量ずつ大気放出を行うこと。
- : LGC の廃棄は、LGC 所有者が行い、使用者が勝手に行わないこと。

## 14. 輸送上の注意

### 危険物輸送に関する国連分類及び国連番号

国連分類 : クラス 2.2 (非引火性高压ガス)

国連番号 : 1073

### 国内規制

高压ガス保安法 : 法第 2 条 (液化ガス)

### 海上輸送

港則法 : 施行規則第 12 条 (危険物公示:高压ガス)

船舶安全法 : 危規則第 3 条危険物告示別表 2 (高压ガス)

### 航空輸送

航空法 : 施行規則第 194 条

### 道路法

: 施行令第 19 条の 13 (車両の通行の制限)

### 特別の安全対策

- : 輸送中の LGC の圧力は、その LGC の常用圧力以下に保持すること。特に長時間輸送するとき、または悪路を通過したときは、途中安全な場所に駐車し、圧力の上昇状態並びに弁類のゆるみ等、随時点検を行うこと。
- : 充てんした LGC は人力での移動は原則として行なわないこと。
- : 移動、運搬のときは、転倒ないようにロープ等で固定すること。
- : 公道上または作業場内を輸送車で運搬する場合は、LGC を車体からはみ出させないように積み込み、転落ないように歯止めし、ロープ等で確実に固定しておくこと。曲がり角での急な転回は行なわないこと。
- : LGC を輸送車からおろすときは、静かに緩衝板などの上に降ろすこと。
- : LGC を吊り上げて移動する場合は、容器弁や配管に玉かけロープを直接かけるようなことは行わないこと。また、マグネットクレーンによる吊り上げは行わないこと。
- : 可燃性ガスと混載するときは、間隔を十分にとること。

## 15. 適用法令

高压ガス保安法 : 法第 2 条 (液化ガス)

航空法 : 施行規則第 194 条

港則法	: 施行規則第 12 条危険物（高压ガス）
船舶安全法	: 第 3 条危険物告示別表第 2（高压ガス）
道路法	: 施行令第 19 条の 13（車両の通行の制限）

## 16. その他の情報

適用範囲	: この化学物質安全データシートは、工業用の液化酸素に限り適用するものである。医療用の液化酸素は別の資料によること。
	: 気化した酸素については、「酸素ガス」の化学物質安全データシートを参照すること。

### 引用文献

- 1) 日本酸素(株)、マチソンガスプロダクツ共編:「ガス安全取扱データブック」、丸善(株) (1989 年)
- 2) C. G. A. :「OXYGEN」、C. G. A. (1980 年)
- 3) C. G. A. :「OXYGEN-RICH ATMOSPHERES」、C. G. A. (2003 年)
- 4) C. G. A. :「OXYGEN-DEFICIENT ATMOSPHERES」、C. G. A. (2003 年)
- 5) C. G. A. :「SAFE HANDLING OF CRYOGENIC LIQUIDS」、C. G. A. (2001 年)
- 6) 日本産業ガス協会編:「酸素・窒素・アルゴンの取扱い方」、日本産業ガス協会 (2000 年)
- 7) 及川紀久雄著:「先端技術産業における危険・有害化学物質プロフィール 100」、丸善(株) (1987 年)
- 8) 中央労働災害防止協会編:「ガス溶接・溶断作業の安全」、中央労働災害防止協会 (2006 年)
- 9) NATIONAL FIRE PROTECTION ASSOCIATION:「National Fire Codes」、N. F. P. A. (1976 年)
- 10) 日本化学会編:「化学便覧」(第 3~5 版)、丸善(株)
- 11) L' AIR LIQUIDE :「GAS ENCYCLOPEDIA」、ELSEVIER SCIENCE PUBLISHERS (1976 年)
- 12) 高压ガス保安協会編:「高压ガスタンクローリ等安全運行指針 酸素・可燃性ガス編」、高压ガス保安協会 (1980 年)
- 13) 吉田忠雄、田村省三監訳:「危険物ハンドブック」、丸善(株) (1987 年)
- 14) 超低温機器協会編:「コールドエバポレーター取扱いハンドブック」、高压ガス保安協会 (2006 年)
- 15) 酸素協会編:「(CE 設置事業所用) 危害予防規程の規範」、酸素協会 (2000 年)
- 16) 超低温機器協会編:「可搬式超低温容器取扱い手引」、超低温機器協会 (2002 年)
- 17) 中央労働災害防止協会編:「新酸素欠乏危険作業主任者テキスト」、中央労働災害防止協会 (2007 年)
- 18) ACGIH :「2007 TLVs and BEIs」(2007 年)
- 19) 日化協「化学物質法規制検索システム:CD ROM 版」(2007 年)
- 20) 大島輝夫監修「化学品安全管理データブック:CD ROM 版」化学工業日報社 (2004 年)
- 21) National Institute of Standards and Technology (米国標準技術局):「NIST Reference Fluid Thermodynamic and Transport Properties Database (REFPROP) Version 8.0」

- 注) ・ 本 MSDS 記載内容のうち、含有量、物理化学的性質等の値は保証値ではありません。  
 ・ 注意事項等は通常的な取り扱いを対象としたもので、特殊な取り扱いの場合はその点を配慮下さい。  
 ・ 危険物有害性情報等は必ずしも十分とは言えないので、本 MSDS 以外の資料や情報も十分に確認の上、利用下さい。